

Global Citizenship Program の取り組み状況と 今後に向けた課題 (2)

中 西 知 子

Ongoing Situation and Obstacles to Overcome in the Global Citizenship Program (2)

NAKANISHI Tomoko

Abstract: At the Department of Multicultural Communication, Faculty of Global Studies, a new curriculum called Global Citizenship Program has been established to develop students' global competence. Last report reviewed the Program from inception to the current situation for the first one and a half year, which was affected by the COVID-19 pandemic from the point of view of a GCP Coordinator who started working at the department at the same time that the new faculty was established. As the COVID-19 is settled, this report will discuss the achievements, lessons learned and challenges to be tackled of the Program for four and a half year for the further development of the curriculum.

Key Words: Experiential Learning, Active Learning, Global Leaders, Global Citizen

要旨: 国際学部多文化コミュニケーション学科では、グローバル・シティズン育成のカリキュラムとして、Global Citizenship Program が創設された。前回の報告では新型コロナウイルス感染症の影響下で、本プログラムが初期の構想から実際の活動へとどのように変遷したか、国際学部多文化コミュニケーション学科発足と同時に着任した GCP コーディネーターの立場から、取り組み開始後 1 年半の概要と課題を述べた。続編となる本稿では、コロナの収束化を経てプログラムがどのように変遷し実施されているか、4 年半の実績を体系的にまとめ、得られる気づきや課題を考察し、プログラムのさらなる発展に繋げる。

キーワード: 体験学習、アクティブ・ラーニング、グローバル人材育成、グローバル・シティズン

1. GCP の概要

2020 年 4 月、文学部多文化コミュニケーション学科は国際学部多文化コミュニケーション学科として新たなスタートを切った。グローバル化が進む社会において、今まで以上にグローバルな現場で必要となる力を備えたグローバル・シティズンの育成を目標として、学科のカリキュラムの中核として創設されたのが Global Citizenship Program (略称 GCP。以下 GCP と表記) である。

報告 (1) と重複するが、最初に GCP の概要

を記載する。GCP とは、国内外の体験学習を通してグローバル社会に必要な知識やスキルを身につけるプログラムを指す。より具体的には、グローバル・シティズンになるために、各学生が身につけたいと考えている能力や将来の進路に応じた国内外でのインターンシップやボランティア等の体験学習に主体的に参加することを通して、グローバル社会へ羽ばたく力を身につけるプログラムのことである。

GCP は Plan (計画)、Do (実行)、Check (評価)、Act (改善) の PDCA サイクルを螺旋階段のように繰り返す成長モデルを軸に据えており、省察し



図1 GCPの学びのイメージ

ながら自分の体験を振り返り言語化するという一連のプロセスを重視している。試行錯誤を重ねながら、体験から得られた成果や課題をいかに次のPDCAに活かし、さらには卒業後の進路やキャリア形成に繋げていくかを視野に入れたカリキュラムとなっている。

GCPのプログラム構築や学生指導はGCPコーディネーターが主として全体を取りまとめつつ、キャリア教育を担当する教員とNGO/NPOでのインターンシップをはじめとする体験学習を担当する教員の3名で定期的に協議の場を持ちながら運用している。他方、GCPはゼミや専門科目、留学等との連携を意識した学科全体の包括的な学びであるため、3名の教員のみならず学科教員全員と進捗や取り組み状況、問題を共有しながら進めている。

2. 海外プログラムの変遷、および実績

GCP活動は海外の活動と国内の活動に分けられる。国際学部が発足した2020年4月から2024年10月までの4年半について、まず海外のプログラムの変遷と実績を記載する。

2.1 学部発足時の海外プログラム

国際学部開始の段階では、以下の海外プログラムの実施が想定されていた。

- 1) GCP 留学
- 2) 学科独自のスタディツアー
- 3) 大学全体の文化研修、語学研修
- 4) 甲南大学のエリアスタディーズ
- 5) CIEE 海外ボランティア
- 6) 公的機関のプログラム

1) から3) の学内プログラムは、新型コロナウイルス感染症（略称コロナ。以下コロナと表記）の蔓延に伴い一部実施形態や内容、頻度が変わった点はあるが現在も実施されている一方、4) から6) の学外プログラムは、4年半の期間に学生を派遣した実績はなく、GCP活動の選択肢から外れることとなった。より詳しくその背景や理由を見ていく。

2.2 交換留学、認定留学、GCP 留学

GCP留学について記載する前に、GCP留学の前提となる交換留学・認定留学の状況と派遣者数の推移を見ておく。交換留学とは協定を締結している協定校に留学し正規の大学の授業を履修する留学制度を指し、認定留学とは留学先で取得した

表1 多文化コミュニケーション学科の交換留学・認定留学参加学生延べ人数 (2024 年 10 月時点)¹

地域	国	留学制度	2020 年度	2021 年度	2022 年度 前期	2022 年度 後期	2023 年度 前期	2023 年度 後期	2024 年度 前期	2024 年度 後期	2025 年度 前期(予定)
アジア	韓国	交換				3	6(1)	3(1)	1(1)	1(1)	5(2)
		認定			7	7	28(2)	11(2)	8(1)	4	12
	中国	交換									
		認定									
	台湾	認定						2	1	2	4
	インドネシア	認定						3			
英語圏	アメリカ	認定							1		2
	カナダ				3	3	6		2		1
	オーストラリア					2	7	2	2	1	2
	ニュージーランド						3				
	アイルランド									1	

科目を本学の単位として認定する留学制度を指す。コロナの影響で延期となっていた交換留学・認定留学は、派遣先を限定して 2022 年度前期から再開された。コロナが収束に向かうのか拡大するのかが推測できなかったことや、一定程度コロナ罹患のリスクがあり、万が一の場合は学生自身がリスク管理を行うことが派遣の条件であったことから、留学を見送る学生も多かった。2022 年度前期派遣学生の 10 名は全員 3 年生で、2 年生の時にコロナ禍で留学できなかった分、リスクを負ってでも大学時代に留学したいという思いが感じられた。表 1 から読み取れるとおり、特筆すべき点はリスク管理の条件が緩和された 2023 年度前期に飛躍的に留学者数が増加したことである。多文化コミュニケーション学科だけでも 50 名、大学全体では 77 名が留学した。コロナ前は 2 年生での留学がもっとも多かったが、派遣内訳は 2 年生 24 名、3 年生 25 名、4 年生 1 名であった。

GCP 留学とは、交換留学または認定留学に現地でのボランティアやインターンシップを組み合わせた留学制度であり、交換留学・認定留学の派遣再開から 1 年遅れの 2023 年度前期から始まった。表 1 で括弧内に示すのが GCP 留学の派遣者数である。2023 年 4 月から現在に至るまでの派遣者実人数は韓国への 5 名のみであり、当初の想

定や学生の希望調査から想定されていた数値とは隔たりがあった。韓国以外にカナダやオーストラリア、アメリカ、台湾も GCP 留学の対象国であるが、これまでに派遣実績はない。理由としては、1 年間の留学のみが対象である点や GPA が同学年の学科内で 1/2 以内であること、また派遣国や派遣先に応じた語学基準が設けられていることが考えられる。韓国の場合、淑明女子大学への留学であれば交換留学でも認定留学でも GCP 留学の対象となっており、交換留学に応募した時点で GCP 留学に求められる GPA と語学基準を満たすことになるため他国と比較すると応募のハードルが低い。また、認定留学の場合でも、GCP 留学の語学基準は TOPIK1 級という初級レベルで、韓国語を履修している学生にとって難易度は高くない。一方、英語圏の場合は学科学生の TOEIC 平均点よりも高い 500 点や 550 点が出願条件とされており、GCP 留学応募のために必要な語学基準を満たしていない学生が大半である。また、昨今の円安の影響で英語圏への留学費用が高額となり、英語圏への 1 年留学を希望する学生が減少していることも理由として考えられる。なお、GCP 留学は派遣先でボランティアやインターンシップを実施した場合に時間数に応じて 1 単位もしくは 2 単位が付与されるが、単位付与のためには規定時間分の活動に参加するだけでなく

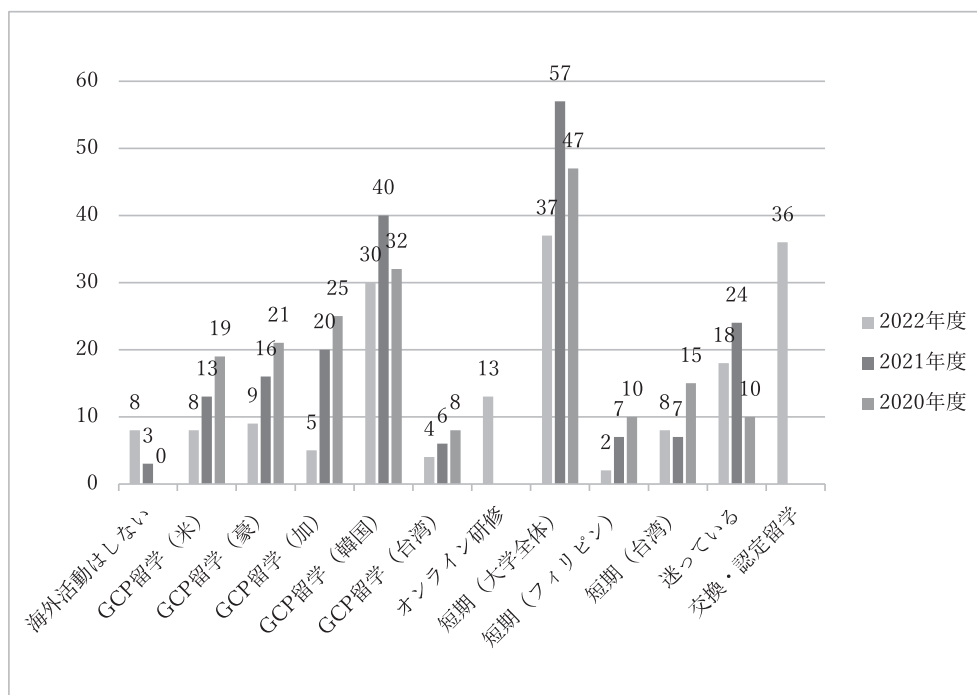


図2 GCP活動(海外)の希望アンケート結果

活動報告書の提出や帰国後の振り返りが求められる。これは、GCP活動の国内プログラムで重視しているPDCAの振り返りと言語化を海外プログラムでも同様に実施するという方針に基づく。

図2で、GCP活動への関心を広げ活動参加への意欲や興味を高める1年生の必修科目「グローバル・シティズンシップ入門(略称「GC入門」)」。以下「GC入門」と表記)で実施した1年生前期時点での海外プログラム希望アンケート結果を示す。2020年4月国際学部多文化コミュニケーション学科入学生(以下1期生と表記)は88名、2021年4月入学生(以下2期生と表記)は97名、2022年4月入学生(以下3期生と表記)は85名であり単純な比較はできないが、総じてGCP留学への関心が常に高いことが伺える。なお、2020年度と2021年度はGCP科目の単位対象外である「交換・認定留学」の項目を回答の選択肢に設けていなかったため、GCP留学希望と回答した学生の中には交換留学・認定留学の希望者が一定数含まれていたと考えられる。また、GCP留学という制度を理解しきれておらず、GCP留学=長期留学と理解して回答を選択した学生がいることも想像される。

2.3 学科独自のスタディツアー

学科独自のスタディツアーとは、学科教員の研究地域で研修を企画し、1週間から10日程度学生を派遣するものである。交換留学や認定留学と同様にコロナの影響で延期となっていたが、2023年3月に初めて13名の学生が8日間のフィリピンスタディツアーに参加した。引率教員の研究分野が海洋資源管理や小規模漁業であることから、海洋保護区を訪問しマングローブの植林を行った地域管理型のエコツーリズムの現場を視察したりする研修で、事前研修および事後研修への参加をもって1単位が付与された。2024年3月には初めての台湾スタディツアー、2回目のフィリピンスタディツアーが予定されていたが、いずれも最少催行人数に満たなかったため実施が見送られた。2024年9月には、学部発足時には想定されていなかった韓国スタディツアーが実施され、11名が参加した。引率教員の専門分野が北朝鮮やメディア論であり日本の報道機関の記者としてソウル支局で勤務した経験があることから、南北境界線付近への訪問や韓国テレビ局でのアナウンサー体験などを取り入れた研修となった。

2.4 大学全体の文化研修、語学研修

学部学科を問わず参加可能な文化研修・語学研修はコロナの影響で2022年度まで中断されていたため、急遽オンライン留学プログラムが開発され、多文化コミュニケーション学科からは2021年春にカナダ3名、韓国3名、インドネシア3名の学生が参加した²。同時期に台湾、フランス、カナダ、アイルランドのオンライン留学プログラムも準備されたが、希望者がいない、もしくは最少催行人数に達しないなどの理由で実施されなかった。2021年夏にはカナダ2名、韓国5名、インドネシア4名、2022年春にはオーストラリア34名、ニュージーランド13名、アメリカ2名、カナダ8名、韓国42名、インドネシア4名が参加し、参加者には学修時間数に応じて1単位または2単位が付与された。台湾プログラムについては最少催行人数に達しなかったため実施が見送られた。表2の人数推移に表れているとおり、2021年度に急激に参加人数が増加した最大の理由は、大学がオンライン留学プログラム参加費用を全額負担する方針を決定したことである。また、学生との面談によると、大学時代に希望していた対面での留学が叶わないと判明したためオンラインでもとにかく留学を経験したいと考えた学生も多数いた。文化研修は、コロナの影響を受け研修数が縮小されたり派遣国や派遣先が一部変更になったりするなどの変更を強いられたが、2022年度から徐々に再開された。2024年度からは、大学の授業時間が90分から105分、授業回数が15回から13回に変更となったことを受け、長期休暇期

間を有効活用すべく5週間から8週間程度の中期海外演習が新たに加わった。ただし、文化研修や学科独自のスタディツアー等と比較すると学科からの参加学生数は4名と限定的であり、円安による参加費の高騰が大きく影響していると考えられる。

2.5 甲南大学のエリアスタディーズ

エリアスタディーズとは、甲南大学で実施される春期および夏期の海外短期研修に多文化コミュニケーション学科の学生が一緒に参加する活動形態を想定していたもので、韓国、アメリカ、イギリス、マルタ等での語学学習にくわえてフィールドワークや現地企業訪問などを組み合わせる研修である。コロナ禍で甲南大学のプログラムがいったん延期となり、その後甲南女子大学でオンライン留学プログラムや学科独自のスタディツアー、中期海外演習などが新規に開発される中で、他大学の研修に参加する案は立ち消えとなった。

2.6 CIEE 海外ボランティア

一般社団法人 CIEE 国際教育交換協議会（略称 CIEE。以下 CIEE と表記）が実施する開発途上国を中心とした数十ヶ国への海外ボランティアプログラムへの参加を想定していたが、甲南大学のエリアスタディーズ同様コロナ禍で大学として学生を海外に派遣することができなくなり、その後2022年1月に CIEE がコロナの影響で日本から撤退したことから実現しなかった。

表2 多文化コミュニケーション学科の海外プログラム参加学生数実績（2024年10月時点）

		活動	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
学内	中期	中期海外演習					4
	短期	スタディツアー			13		11
		文化研修・語学研修			4	14	6
		オンライン留学	9	114			
学外		甲南大学エリアスタディーズ					
		CIEE 海外ボランティア					
		公的機関の学外プログラム					

2.7 公的機関のプログラム

公的な機関による学外プログラムへの参加の選択肢として、例えば内閣府が実施する青年国際交流事業である世界青年の船や外務省が進める対日理解促進交流プログラム JENESYS などが検討されていた。コロナ禍で公的な機関によるプログラムが延期・中止になり、GCP 活動としての参加も止まったままである。前述の甲南大学や CIEE によるプログラムへの参加と比較すると、公的機関のプログラムは選抜制であることが多く、海外経験の少ない本学の学生が参加するにはややハードルが高い。費用が安価、もしくは費用負担がほばないなど経済面でのメリットが大きいプログラムもあるが、現在のところ参加に至る可能性は低い。

2.8 現時点での海外プログラム

上記変遷の結果、現在実施されている海外プログラムは GCP 留学、学科のスタディツアー、大学全体の文化研修・語学研修および中期海外演習である。コロナの影響があったとはいえ、当初の予定より海外プログラムの選択肢が少なくなっており、また学内のプログラムで完結しているのが現状である。大半の学生がそもそも海外に渡航した経験がない、語学力に不安を覚える中でいきなり学外プログラムに参加することは難易度が高いものの、学内に限定されない幅広い参加者との交流など学外プログラムならではの利点もあるため、今後に向けて参加可能な学外プログラムを再検討していく余地がある。

3. 国内プログラムの変遷、および実績

3.1 学部発足時の国内プログラム

国際学部開始時は、以下の国内プログラムが想定されていた。1) から 3) は関係機関と連携するプログラムで、4) から 6) は大学が直接実施するプログラムである。

- 1) 文化交流創生コーディネーター (略称 ICCO。以下 ICCO と表記)

- 2) ESD スタディツアー
- 3) CIEE 国内ボランティア
- 4) NGO/NPO インターンシップ
- 5) グローバルキャリアインターンシップ
- 6) ソーシャル・ビジネス演習

3.2 文化交流創生コーディネーター (ICCO)

ICCO とは、新たな時代や社会づくりに向けて、人と人、人とモノ、地域と地域、地域と世界など、文化と文化の間に繋がりをつける力を備えた人材を育成すべく日本国際文化学会が認定している資格である。資格を得るためには、宿泊型で実施される 1 週間程度の ICCO 短期集中セミナーへの参加が必須であり、同セミナーを GCP の国内プログラムの 1 つと位置付けていた。2020 年度と 2021 年度はコロナ禍でセミナーの実施が見送られたが、2022 年度はオンラインで実施され、2023 年度からは対面で再開された。当初はセミナーに参加することで 2 単位を付与する予定であったが、GCP 科目の運用上の理由により単位は付与されないこととなった。2023 年度にセミナーに参加した学生の「大学も年齢も違うメンバーと共に行動し意見を出し合う 1 週間は多くの刺激をもらえて、新しい視点を発見できたり、新しい文化に触れることができました。」との振り返りコメントに象徴されるとおり、日本全国から参加している ICCO 参加認定大学の学生と関わる貴重な機会となっている。現在のところ、単位を付与しないことによるセミナー参加人数の減少は見られない。

3.3 ESD スタディツアー

ESD スタディツアーは、ESD 推進ネットひょうご神戸が主催する Education for Sustainable Development (略称 ESD: 持続可能な開発のための教育。以下 ESD と表記) を体験するために作られたプログラムである。NGO/NPO、市民活動団体、企業、行政、学校等が持続可能な社会づくりのために実施する多様な活動の現場に参加するもので、例えば稲刈り体験や川や海岸でのごみ拾

い、外国にルーツを持つ子どもへの学習支援などが挙げられる。活動の特徴は、ESD 推進ネット ひょうご神戸に登録されている関連団体と活動種別の幅広さ、スケジュールの自由度で、日程、場所、学生の学びたいテーマ、身につけたいスキルに応じた活動選択が可能である。2021 年度から対面での活動が少しずつ開始され、15 時間以上の活動をもって通年で 2 単位が付与されるが、1 つの団体で複数回活動を行う形態でも毎回異なる団体や活動に参加する形態でもどちらでもよいいため柔軟性が高く、その結果学生の満足度にも繋がりがやすい。例えば、参加学生からは「地域交流、自然保護、異文化理解など様々な分野のボランティア先に行って、自分の好きな分野を見つけることができた。」との振り返りコメントがあった。



写真 1 子どもを対象とした ESD スタディツアー

3.4 CIEE 国内ボランティア

GCP 開始当時は海外プログラム同様、国内でも CIEE が実施するボランティアプログラムへの参加を想定していたが、コロナの影響で 2022 年 1 月に CIEE が日本から撤退したことから実現しなかった。ただし、CIEE で予定していた国内ボランティアプログラムは前述の ESD スタディツアーと内容が類似していることから、同プログラムがなくなったことへの影響は大きくないと考えられる。

3.5 国際交流プログラム

当初想定していなかった活動として大学コンソーシアムひょうご神戸と協働で実施する国際交流プログラムが挙げられる。国際交流プログラムは学生のニーズを踏まえて 2020 年度に新規に立ち上げたプログラムで、ディスカッションやキャンパスツアー、運動会、交流パーティーなど、留学生との交流事業を学生が企画、運営するものである。2021 年度はコロナの影響によりオンラインのみであったが、2022 年度からオンラインと対面の両方で実施され、2023 年度からはほぼ対面での実施となった。通年で 2 単位が付与されるもので、年々留学経験者による履修が増加している。留学の時期によっては留学前にガイダンスに相当する前期の授業を受講し、帰国後に留学生との交流活動を行うことで、留学で培った語学力やコミュニケーション力をさらに伸ばすことが可能となる。留学経験のある学生が参加することで、留学生との密なコミュニケーションが生まれたり、自身の留学経験に基づき留学生の立場を深く理解しようとする姿勢が見られたり、これから留学を検討している学生への良い影響も伺える。学生からは「自分も留学を経験し、もどかしい瞬間に出会うことが多々あったため、日本語を話すことに苦勞する留学生の気持ちがよく分かる。」との振り返りコメントが挙げられた。本学は大学コンソーシアムひょうご神戸と連携協定を締結しているため、産官学の連携という観点からも本活動の意義は高い。

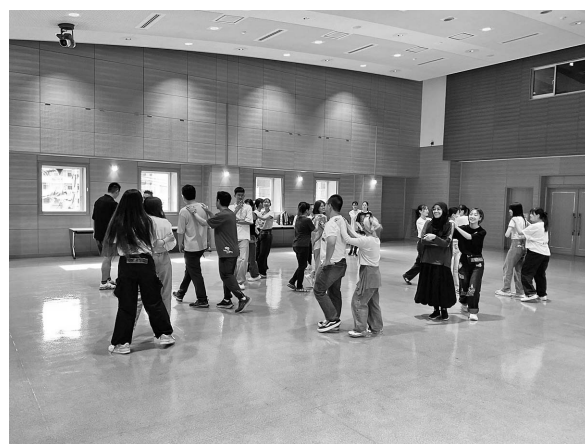


写真 2 留学生との運動会

なお、当初想定していなかった活動として、国際交流プログラムのほかに国際ボランティア学会の活動の一環で実施された震災学習プログラムがある。2021 年度に 1 度実施されたもので、4 名の学生が参加した。

3.6 NGO/NPO インターンシップ

NGO/NPO インターンシップは、GCP 創設以前から実施されていた科目を GCP 活動として位置付けたもので、例えば多文化共生センターひょうごで地域に根差した多文化共生フェスティバルの準備や補助、大阪ボランティア協会での企画書作成や会議への参加、通常業務へのサポートなど NGO や NPO での就業体験をするものである。定員 20 名で実施され、30 時間以上の活動をもって通年で 4 単位が付与される。各学生との個別面談を実施の上、学生の興味関心分野や居住地などに応じてインターンシップ先をマッチングしており、学生のニーズにきめ細かく対応する活動となっている。

3.7 グローバルキャリアインターンシップ

国際学部発足に向けた新カリキュラム検討時は、ホテルやテーマパークでのインターンシップを想定しており、パイロット事業として文学部多文化コミュニケーション学科の学生数名が 2 週間程度ウェスティンホテル大阪や志摩地中海村でのインターンシップに派遣されたが、コロナ禍で学生受け入れが困難となったことやインターンシップでは派遣人数が限定的になることから、インターンシップではなく企業訪問やゲストスピー

カーや卒業生とのキャリア対話を中心とするプログラムへと変遷した。それに伴い名称も「グローバルキャリアインターンシップ」ではなく、「グローバルキャリア演習」に変更された。企業訪問例としては、株式会社フェリシモ、株式会社ホテルグランヴィア大阪、三ツ星ベルト株式会社、株式会社ワコールホールディングスなど、業界が多岐に渡っている点が特徴的である。企業への訪問は、主に夏休みや冬休み、集中講義期間等を利用して実施され、通年で 2 単位が付与される。定員は 20 名に設定されているが、表 3 に記載のとおり定員を超過して実施した年度もある。GCP 面談で多くの 1 年生から将来やりたいことが見つからないことへの不安を耳にするが、そうした学生の不安を解消する学びの 1 つとなっている。

3.8 ソーシャル・ビジネス演習

ソーシャル・ビジネス演習は、問題解決型学習を取り入れながらグループワークを中心に社会課題解決のビジネスを企画・立案する科目である。ソーシャル・ビジネス演習以外の国内プログラムはすべて通年履修を基本とした学外活動が主であるが、ソーシャル・ビジネス演習は後期に開講される 2 単位の講義科目である。通年科目は前期と後期の両方の科目を履修する必要があるため、留学に行く学生が履修しにくいケースもあるため、半期完結型科目があることで卒業に必要な科目の履修を取りこぼしにくくなる。また、学外活動が苦手な学生もいるため、講義型で他の GCP 活動同様のスキルを得られる選択肢があることは重要である。「グループワークが多いため色々な人と交流

表 3 多文化コミュニケーション学科の国内プログラム参加学生数実績 (2024 年 10 月時点)

		活動	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	2024 年度
国内	講義	ソーシャル・ビジネス演習		14	14	11	8
	学外	ICCO			2	5	3
		ESD スタディツアー		14	14	11	8
		国際交流プログラム		20	12	20	32
		NGO/NPO インターンシップ		15	9	12	14
		グローバルキャリア演習		17	25	22	20

し、様々な意見を知ることで視野が広がる。」との学生コメントに代表されるように、多種多様な考えに触れ、対話しながらプロジェクトを形成していく経験を積むことができる活動と位置付けられている。

3.9 現時点での国内プログラム

これまでに述べた変遷の結果、GCP の枠組みとして 2024 年 10 月現在実施されている国内プログラムは、単位対象外の ICCO のほかに ESD スタディツアー、国際交流プログラム、NGO/NPO インターンシップ、グローバルキャリア演習、ソーシャル・ビジネス演習となっている。活動の選択肢は一定数あり、大幅に履修人数が偏るといった問題も起こってはいるが、随時内容の見直しや改善を重ね、学生のニーズに応えつつグローバル・シティズンとなるために必要なスキルが伸ばせるプログラムとなっているかの検証が必要である。また、活動自体は異なっているが、活動計画策定や個人およびグループでの振り返りを重視しつつ次の活動に繋げていく PDCA アプローチを共通の枠組みとして、科目間で横の連携を取りながら進めていくことが不可欠である。

4. 報告（1）の課題に対する取り組み

報告（1）では、GCP 開始から 1 年半が経過した時点で見えてきた課題や今後必要な取り組みとして、国内活動への興味関心の喚起、活動の振り返り、学科専門科目との連携の 3 点を列挙した。本章では、それらの課題についてその後の取り組み状況を記載する。

4.1 国内活動への興味関心の喚起

1 期生は 88 名中 85 名、つまり 97% の学生が 2 年生で国内活動を選択した。1 年目から GCP 活動の周知やモチベーション向上の工夫を行ったことの表れとも言えるが、2 年生になった時点で希望する海外プログラムが再開されていなかったため、消去法として国内活動を選択した学生も一定

数いたと考えられる。学生との面談では、留学がいつ再開されるか分からないので卒業に必要な単位は 2 年生でとりあえず修得しておきたいといった声も聞かれた。2 期生については、1 年生の間に 97 名中 71 名、つまり全体の 73% がオンライン留学プログラムに参加しており、同プログラムの大半が GCP 科目 2 単位として認定されるため国内活動を希望する学生が大幅に減ることが危惧された。しかし、蓋を開けてみると卒業に必要な GCP 科目 2 単位以上をオンライン留学プログラムのみで完結させた学生は同プログラムを受講した 71 名中 35 名であり、オンライン留学プログラムを受講した学生の約半分がオンライン留学に加えて国内活動の科目も履修した。また、97 名中 35 名が GCP 科目を 4 単位以上取得している。卒業に必要な単位取得のために最低限の科目を履修するという考えの学生は一部に限られており、GCP 活動への関心の高さや入学時から様々な機会をとらえて GCP 活動について伝えてきた効果、またキャリア教育の一環として早い段階から GCP 活動を就職活動の準備に繋がるものと位置づけたことの表れと言える。

対面での海外プログラムが再開された後も国内活動に目を向けさせる工夫として、先輩の体験談を後輩に伝える機会を多く設定していることが挙げられる。1 年生の必修授業である「GC 入門」や 2 年生に進級する直前に全員が参加する GCP 活動オリエンテーションで国内活動を経験した先輩を招き、学生の視点から国内活動のやりがい、楽しさ、得られたスキルなどを語ってもらう。先輩の体験談を聞いた 1 年生からは、「絶対留学にいかうと思って希望者全員留学を取り入れている甲南女子大学を選んだけど、国内活動だけでも普段の生活では経験しがたい活動に参加できて自分の力にすることができると分かりました。」など、留学以外の選択肢にも目を向けたコメントが複数確認された。さらには、「先輩方に共通して言えるなと思うことは自ら行動して自分でチャンスを掴んでいってるといことです。」「まず大学の間にいろんなことにチャレンジして、自分の合う、

合わないなどを知りまずは自分のことを理解するということが重要だとおっしゃられていたのがとても印象に残りました。」など、先輩が語る経験談が、どんな活動を選択しても自分自身の行動や考え次第で将来生きていくために必要なスキルを身につけられるという長期的な視点を持つきっかけになっていることが感じられた。GCP の運営を通じて痛感するのはこうした身近なロールモデルの大切さである。もしかしたら私もこんな風になれるかもしれない、私もこんな先輩のようになりたいと感じさせることが学生のモチベーション向上や目標達成に大きく影響を与える。

上述した授業や GCP 活動オリエンテーションでの体験談の共有は、1 人ずつのプレゼンテーションであったり、複数の先輩によるパネルディスカッションであったり、GCP コーディネーターが質問をしながら進める対話形式であったり、選ばれた一部の学生が後輩に経験を伝える取り組みとなっているが、GCP 活動に参加した学生全員が活動を振り返り、気づきを言語化し、他者に伝えていく活動も行っている。それが GCP 活動ポスターセッションである。国内活動への興味関心の喚起に繋がっているこのポスターセッションについて、次の項でより具体的に記載する。

4.2 活動の振り返り

GCP では、省察しながら自分の体験を言語化するプロセスの一環として、GCP 活動を通じて得た学びをアウトプットするためのポスター作成を取り入れている。国内活動に参加した学生がグループごとに作成したポスターは、2021 年度が 28 点、2022 年度が 23 点、2023 年度が 25 点で、学科のコモンルームだけでなく学生が多く利用する 4 号館の廊下やピロティにも一定期間掲示している。また、ほかの学科の学生や教職員、学科に興味を持っている高校生やその保護者の目にも触れるよう、図書館やオープンキャンパスでも掲示する工夫を行っている。2021 年度は密を避けるためにポスター掲示のみとなったが、2022 年度からはポスターの前で学生同士が質疑応答を行う

ポスターセッションの形式とし、お互いの活動から学び合う仕組みを取り入れた。



写真 3 GCP 活動ポスターセッション

活動の振り返りという観点から、新たに導入したもう 1 つの取り組みが GCP リフレクションである。GCP 活動後に実施する学生との 1 対 1 の面談では、活動日誌や学生が語る言葉の端々から活動を通して深い気づきを得たことが表れていることが多いが、得られた気づきが 3-4 年ゼミや卒業研究テーマの選択に結び付いていないとの懸念があった。2022 年度から始まった GCP リフレクションは、留学も含んだすべての GCP 活動や 2 年間で履修した授業、関わった活動をとおして得た学びを 3 年ゼミである「グローバル・シティズン演習」の授業を使って振り返り、残り 2 年間の大学での学びや卒業研究選択に活かしていくための取り組みである。ワークショップやグループでの対話をとおして PDCA サイクルの Check フェーズを Act、そして次の Plan に繋げていくための場で、「グループの子達に全く違う方向から質問されることでより経験を深く思い出すことができた。」「同じ授業やプログラムでも感じることはそれぞれ違うので、グループ内でお互いを感じたことを言語化して伝えたり聞いたりする中で自分との捉え方の違いや共通している感情を見つけることができて、1 人ではなく他の人と共有しながら一緒に振り返ることでは気付けないこともあるのだと学びました。」など学生自身が成長を実感し、振り返りの意義を体感しているコ

メントが多く見られた。こちらがこれまで意識的に使ってきた「PDCA」「言語化」という言葉を、学生自らが振り返り時に使っている点も特徴的であった。振り返りや言語化を繰り返し行うことで、経験を振り返り次に繋げる習慣作りに繋がたいと考えている。

4.3 学科専門科目の連携

GCP 活動の取り組みは4年間のカリキュラム全体の包括的なプログラムの一部に過ぎない。重要なのは、GCP 活動での学びを GCP コア科目であるゼミやその他の専門科目に繋げ、有機的に連携することであると報告（1）で述べたが、前述の GCP リフレクションはその集大成であり、まさにゼミや専門科目のみならず、共通教育科目やその他の学びをすべて振り返り、今後の学びに繋げる貴重な機会となっている。2022 年度に初めて GCP リフレクションを実施した際、せっかく2年間の学びを振り返りつてもすでに3年生のゼミ分属が決定してははその意義が半減するのではないかとの学科内での議論を受け、2023 年度からは GCP リフレクションの実施後に3年生のゼミ分属を行うスケジュールに変更した。履修登録のタイミングなど教務上の問題点はあるものの、GCP リフレクションをとおして見えてきた残り2年間で深掘したい学びや研究テーマをゼミ選びに繋げるという観点では一定の成果が出ている。

キャリア担当教員が管轄しているグローバルキャリアプログラムでも、GCP 活動を含む大学での学びをどう就職活動や今後のキャリアに繋げていくかについて個別面談が実施されたり、担当教員による助言がなされたりしている。これも、学科内の学びの中で緩やかな連携が発現している例として挙げられる。



写真4 GCP リフレクション

5. 考察とまとめ

本稿では、2020 年4月から開始した GCP 活動について、4年半の取り組み状況を海外プログラムと国内プログラムの変遷と実績から報告し、検証した。コロナ禍という想定外の状況下、プログラムは軌道修正せざるを得ず、海外プログラムに参加することができないことによる学生の学習意欲低下が懸念されたが、オンライン留学プログラムや国内での国際交流プログラムなど学生のニーズに沿った新たな取り組みが弾力的に導入されるという柔軟な対応が生まれた。また、学び合いの中で振り返りを重視するポスターセッションや GCP リフレクションの取り組みを通じて、GCP 開始から1年半が経過した時点で挙げられていた課題が一定程度解消し、国内活動へのさらなる関心喚起や縦と横の双方で学生同士の学び合いがうまれていることが確認された。

2024 年3月には国際学部初めての卒業生として1期生が巣立ったが、GCP で得たスキルや学びがこれからのキャリアの中でどう生かされているかこそ、真の意味で GCP の評価となる。毎年実施されているジェネリックスキルの成長を支援するアセスメントプログラムである PROG や学生へのインタビュー等をもとに、今後は GCP が学生の成長にどう繋がっているかについて量的、質的の両方の観点から検証するとともに、1期生から5期生までの傾向分析比較にも取り組んでい

きたい。

ケーション学科の学生も含む。

註

- 1 表の（ ）内の人数は留学派遣延べ人数の内、GCP 留学の派遣者数。
- 2 2020 年 4 月以前に入学した文学部多文化コミュニ

なかにし ともこ

甲南女子大学国際学部多文化コミュニケーション学科
講師